

## 信仰告白の形式—内坂さんに応えて

『からしだね』55号で、内坂晃さんが「最近考えたこと、から」というエッセイの後半で「(4)形式と精神」と題して、厳しい「無教会」批判をしておられる。内坂さんを敬愛する友人の一人として、また「無教会人」の一人として、これに応答しなければならないと感じるので、一筆啓上することにする。

問題は「洗礼式」のことだが、内坂さんは洗礼式が「信徒の信仰告白の形式として、その長い伝統の中で教会が育ててきたもの」と定義し、「この洗礼式という形式を拒否した無教会は、では、聖書的根拠を持ったいかなる、より良き信仰告白の形式を生み出したのか。無教会人は、いつ、どこで、どのような仕方、異教国日本において、神と人の前でキリスト信仰を告白しているのかが問われねばならない。単に洗礼式という形式を拒否しただけでは、その形式に盛られている精神を尊重したことにはならないのである」と問いかけている。

この問題に答える前に、「洗礼式という形式を拒否した無教会は」とあるのは、必ずしも正確ではない。内村鑑三について言えば、彼は「無教会主義とは、教会は有ってはならぬということではない。有るも可なり無きも可なりということである」(「無教会主義について」と言っている。この「教会」を「洗礼」と読みかえれば、彼は「洗礼は有るも可なり無きも可なり」と言っているのであって、決して洗礼式を拒否しているのではない。現に、彼は子息祐之をはじめ少なからぬ数の弟子たちに洗礼を施したことは、周知の事実である。

私がここで明らかにしておきたいことは、「無教会」が洗礼式を拒否することがあるとすれば、それは「教会」が(水の)洗礼を、イエス・キリストの十字架による罪の赦しの救いの必須条件であると主張する場合だけであって、「信徒の信仰告白の形式」としての洗礼式ではないということである。すなわち、「無教会人」はそのような洗礼式を敬意をもって尊重する。ただ、内村のように、そのような洗礼式は「有るも可なり無きも可なり」と考えるのである。キリスト者には「無きも可なり」とする自由があると信ずるのである。

それでは「無教会人」は、洗礼式以外にいかなる「信仰告白の形式」を持つか。もしこの「形式」を教会で行われる儀式と解するならば、「無教会人」にはいかなる「信仰告白の形式」もない。「無教会」は洗礼式にまさる、「いかなる、より良き信仰告白の形式」も生み出してこなかった。なぜなら、そのような形式を「無きも可なり」とするのが無教会主義だからである。

しかし、内坂さんの言う「そこに精神が盛られている形式」、ある

いはイエスの言う「隠れているもので、知られてこないものはない」という意味での「信仰告白の形式」は、もちろん「無教会人」にもある。いや、無ければならないであろう。その一例を「ペテロの第一の手紙」に聞いてみることにする。

そこで、もしあなたがたが善に熱心であれば、だれが、あなたがたに危害を加えようか。しかし、万一義のために苦しむようなことがあっても、あなたがたはさいわいである。彼らを恐れたり、心を乱したりしてはならない。ただ、心の中でキリストを主とあがめなさい。また、あなたがたのうちにある望みについて説明を求める人には、いつでも弁明のできる用意をしていなさい。しかし、やさしく、慎み深く、明らかな良心をもって、弁明しなさい。そうすれば、あなたがたがキリストにあって営んでいる良い生活をそしめる人々も、そのようにののしったことを恥じるであろう。（3・13～16）

「ペテロの第一の手紙」の主題は「苦難」である。著者はこの語をこの「短い手紙」の中で実に17回も用いて、キリストの苦難と、キリスト者の苦難についてくり返し語っている。「あなたがたが善を行って苦しみを受け、しかもそれを耐え忍んでいるとすれば、これこそ神によみせられることである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」と。（2・20～21）

そもそもキリスト者になるということは、決して特別な人間になることではない。何か変った生活をするわけでもない。彼らのごく平凡な普通の市民として、誰とも平和に、誰に対しても善意をもって生きていきたいと願っている。にもかかわらず、世の人はキリスト者を何か異人種であるかのように思い（「驚きあやしみ」（4・4）の原意）、ついには彼らを「ののしる」（同）に至る。著者は、それはキリスト者がもはや世人の「ひどい乱行に加わらなくなった」（同）からだと言うが、いずれにしても、これがキリスト者であるための苦難であろう。

キリスト者が、たとえそのような「不当な苦しみを受ける」ことがあっても、「彼らを恐れたり、心を乱したり」することなく、「神を仰いでその苦痛を耐え忍び」、「りっぱな行いをし」、「悪をもって悪に報いず、悪口をもって悪口に報いず、かえって、祝福をもって報いる」ように努めていると、世の人は「あなたがた（キリスト者）のうちにある望みについて説明を求める」ようになる。内村はかつて、キリスト者は「神の子なるがゆえに、人の中にありては奇怪人物たる

なり」(「クリスチャンとは誰ぞ」)と喝破したが、まさにこの奇怪性が世人の注目するところとなり、まるで異人種のようなキリスト者の新しい生き方の実態は何か、その原因はどこにあるか、いったい何が彼らをそのように生かしているのかと、その「説明を求めてくる」というのである。キリスト者は、いつそのようなことがあっても、それに対して十分な答えができるように、しっかりと用意しておけ、というのである。

ところで、ここに「弁明」と訳された語は、特に法廷における被告の答弁、言い開き、弁護釈明の言葉を使うもので、たとえば、捕われたパウロがアグリッパ王の前で弁明したことが、「使徒行伝」に記録されている。信仰の弁明とは、世の人に訴えられて、仕方なく、止むを得ず、信仰を釈明することである。必ずしも常に、堂々と、積極的に、熱心にキリスト教を教えることとは限らないのである。そして、言うまでもないことながら、信仰の弁明とは、「信仰告白」のことであり、伝道のことである。

ここでキリスト者が説明を求められているものは、「あなたがた(彼ら)のうちに<sup>あ</sup>る<sup>望</sup>み」であるという。そのすぐ前には「ただ、心の中でキリストを主とあがめなさい」とも勧められている。すなわち、この望みは彼らの「うちに<sup>あ</sup>る<sup>望</sup>み」のものであり、主をあがめることは「心の中で」、キリスト者の靈魂の奥底で、生起した聖なる事柄である、ということである。それゆえに、このことは、その人と、これを与えられた方との間だけの秘密として、大切にしまっておくべきものである。徒らにこれを公開し、軽々にこれを説明しようとするべきものではない。「山上の垂訓」に明らかなるように(マタイ六・1～18)、イエスの神は「隠れた所においでになる」神であり、彼の宗教は密室の宗教である。

いま、迫られて、その聖事を少しく説明しようとする。これは本来説明すべくもないものである。稲妻に比せられる(ヒルテイ)信仰が、いまたまたま一つの軌跡を引いた。その軌跡が世人の間で問題になって、軌跡を描いたそのものは何か、説明せよということになった。書いかえれば、信仰は見えないものなのであって、その軌跡という見える、具体的なものからのみ、辛うじて少しく語り得るにすぎないのである。イスラエルの預言者は「事実<sup>に</sup>即<sup>さ</sup>ず<sup>に</sup>は<sup>何</sup>事<sup>も</sup>語<sup>ら</sup>な<sup>か</sup>つ<sup>た</sup>」(G.A. スミス)と言われるが、信仰の発言とはそうしたものである。

この手紙の著者はさらに勧める。「あなたがたのうちに<sup>あ</sup>る<sup>望</sup>みについて説明を求め<sup>る</sup>人<sup>に</sup>は、やさしく(わかりやすく、ではなく柔和に)、<sup>慎</sup>み<sup>深</sup>く(原意は、神に対する畏れをもって)、<sup>明</sup>ら<sup>か</sup>な<sup>良</sup>心

をもって（確信をもって）弁明しなさい」と。消極的といえれば消極的かも知れない。しかしながら、私どものような弱い、平凡な人間が、巧みな言葉をあやつるのでもなく、深遠な知識に通じているわけでもない、山を移すほどの強い信仰もなければ、いわんや町なかでラッパを吹きならすことなどしない。ただただ静かに、謙虚に、どこまでも善良に、慎みぶかく生きているにもかかわらず、世の人に異様に思われ、あるいは憎まれ、あるいは恐れられ、あるいはののしられ、あるいは敬遠されて、ついには法廷にひき出され、問いつめられて、弁明するに至る。

このような状況の中で、著者のこの勧めは何と深い慰めと、力強い励ましとに満ちていることか。そして、このような私どもの生きよう、すなわち「キリストにあって営んでいる良い生活」にまさって確かな「信仰告白」が他にあるだろうか。「無教会人」のひとりである私は、内坂さんに答えて、「いまこのとき、ここで、このような仕方で、異教国日本において、神と人の前でキリスト信仰を告白しています」と、心を低くして告白したいと思う。

そして、もしこの信仰告白に余りにも深く満足し、感謝に溢れるとき、「洗礼式は無きも可なり」と考えることも許されるのではないかと思うが、いかがであろうか。

いや、そのような信仰告白（の形式）は「洗礼式」の具体性に比べて、余りにも抽象的ではないかという批判があるかも知れない。これに対しては、無教会主義の（少なくとも一つの）存立根拠とも言うべき次の内村の言葉を引く以外に、非力の私には答えるすべはない。

形式主義が物質主義に陥るように、靈性が非現実性に陥る危険性はあるかもしれないが、その本質において靈性は、あらゆる存在のなかで最も確実なものであり、健全な思考と有効な行為の基礎として十分に頼ることのできるものである。（英文「靈と形」）

（所載）「からしだね」58号

（大阪天下茶屋読書会、1992年9月）